

今月号のトピックス

- ・新年度のご案内
- ・3学期期末テスト対策
- ・千年前から変わらないもの
- ・公立高校受験生 最後の追い込み

新年度のご案内

★3月2日（月）から2026年度の授業を開始します。次学年での授業となりますので、ご注意ください。

（例：現中2⇒3月2日からは中3）

<新年度のお申込み>

『2026年度総合案内』と『新年度科目登録書』を2月2日(月)より授業時に配布いたします。『新年度科目登録書』を2月25日(水)までに教室にご提出ください。

3学期期末テスト対策

★2月2日（月）から3学期期末テスト対策期間になります。（城南中・初雁中の2年生は1月29日からです。）

★中学3年生もこの期間は受験対策期間として、定期テスト対策と同様に学習してもらいます。受験対策の課題を出していきますので、必死に最後の追い込みをしていきましょう。

★中学3年生の最後の通塾日は、面接がない生徒は2月25日（水）です。面接がある生徒は2月26日（木）です。2月26日は最後の面接練習を行います。

千年前から変わらないもの

冬期講習、お疲れさまでした。3学期が始まり、中3生はいよいよ受験勉強のゴールが見えてきました。

冬期講習の国語では、過去の入試問題やほかの県の問題に取り組みました。文の題材、難易度や問題文の質など、県ごとに異なっており、受験生がうまく取り組めるように吟味しながらその日に渡す課題を決定しています。

冬期講習の後半に取り組んだ古文の入試問題は、ユニークなエピソードが題材になっていました。

平安時代の音楽家・和邇部用光（わにべのもちみつ）という人が、高知県の祭りに出かけた帰りの船で、海賊に襲われました。弓矢が使えるわけでもないので抵抗することもできず、殺されることを確信した彼は楽器を取り出し、船の屋根に立って言います。「何でも盗んでいってください。でもその前に、長年大切にしてきた曲を演奏させてください。こういうことがあったのだ、という話の種にでもするといい」

この言葉を聞いた海賊のリーダーは、部下に耳を傾けるように言いました。あたりが静まり返り、用光は涙を流しながら楽器を演奏しました。

演奏を聞き終わった海賊のリーダーは用光の音楽に感動し、何も盗ることなく、その場を去っていきました。

この話が描かれたのは、鎌倉時代のことだそうで、音楽が人の心を打つ、という題材は現代にも通じるところがあります。死ぬかもしれない、と人間が覚悟して放つ音楽は、それはすさまじいものが込められていたに違いありません。音楽に感動するという感覚は千年以上昔にもあって、それがこうして現代にも変わらないものとして残っていると知れるのは、古文を勉強することの一つの楽しさだと思います。

高校に入ると、古文は選択制になり、2年生あたりからは勉強しなくなるかもしれません。今のうちに、一生分の古文を読んでおきましょう。

（大崎）

公立受験生、最後の追い込み（五つの意識）

毎年、受験生にお伝えしている追い込み期の意識の持ち方を紹介します。

一. △を○にする。

ここまで受験生のみなさんは、とにかく大量に勉強をして、多くの知識をひたすら身につけてきました。しかし、ここからは新しい知識、難しい内容を身につけようとする必要はありません。みなさんが身につけてきた知識の中には、「どんな場合でも、どんな形で出題されても必ず解くことができる○の知識」と、「何となく分かっているけど、たまに間違えてしまう△の知識」が混じっています。ここから入試本番までの学習は、この△の知識を○に変えていく作業が重要です。

中には、直前になって新しい問題集や、難しい問題をたくさんこなそうとする生徒さんがいます。しかしそれで身につく知識は△の知識であることがほとんどです。△の知識は入試では役に立ちません。本番は非常に緊張します。時間にも追われます。そんな中で、△の知識はほとんどの場合、×の知識に変わります。

例えば、地理の工業地帯・地域を何となく覚えている生徒さんは、入試本番で「京浜工業地域」と答えてしまうかもしれません、これでは点になりません。「京浜とか京葉とか阪神とかは覚えているけど、地域、地帯は覚えてない。」ではいけないのです。「京浜、中京、阪神の3つは地帯なんだ。」と確実な○の知識を持っている生徒さんが点を伸ばします。今から×の知識を△にしていく勉強は効率がいいと言えません。新しい知識を増やすのは時間がかかりますし、点になりにくいのです。

それよりも、今持っている△の知識を探して、それを○にしていく学習をしていきましょう。冬休みにやった問題をもう一度見直しましょう。今までまとめたノートを見返しましょう。「何となくやった覚えがあるけど、100%覚えているわけではないぞ。」という知識がたくさんあるはずです。一度、覚えた知識、理解した内容をもう一度自分のものにするのは、それほど時間はかかるないです。

二. その場で覚える。

受験までまだ日があるときは、「いつか覚えればいいや。」でもある程度通用するかもしれません。しかし、ここからはそれは通用しません。今日分からなかった問題を「いつか」と先延ばしたら、入試本番まで、その問題を目にすることがないかもしれませんからです。先延ばした問題に、残り一ヶ月弱の勉強期間で触れない可能性の方が高いのです。分からなまま、一ヶ月を過ごし、入試本番でそれが出題されたら間違いなく点を落とします。

「もし、この問題が入試本番で出題されたら…」そういう危機感を持つことが重要です。間違えた問題を直すだけで、まとめるだけで満足する期間は終わりました。直して、まとめて、「覚える」のが最後の追い込みです。

三. 設問を集中して読むこと。

最後の追い込みのこの時期、もう一度基本に忠実になることが重要です。基本に忠実になる、つまり普段の学習から設問を徹底的に集中して読むことです。

実は、入試で大きく合否を分けるのは、知識の量ではありません。なぜなら、知識の量や問題を解く力に歴然と差があるとしたら、その生徒さんはその学校を受験しないからです。

100～120の力が必要な学校に、70しか力がない受験生はもともと勝負をしないでしょう。逆に160くらいの力があるのなら、志望校を1つ上げるのが普通です。100～120の学校には、90～130くらいの実力の似通った受験生が入試に集まるのです。

そんな中で、勝負を分けるのはケアレスミスです。

皆さんの中にも、入試模擬テストで「記号で答えなさい。」という問題に用語で答えたり、解答欄を間違えて答えを書いてしまう生徒さんがいます。「○○法の目的を答えなさい。」という設問に「○○法の内容」を答えたり、「～の課題は何か。」という設問に「～の対策」を答えたりしてしまうケースもまだ見られます。

入試模擬テストの判定でしっかりと結果が出ていれば、実力の面では、確実に合格圏に入っています。しかし、120の実力をもっていても、入試本番で90の実力しか出せないのでいけないのでです。120の実力を110～115くらいで出すためには、「設問を集中して読むこと。」という非常に基本的なことをもう一度意識する必要があります。

四. 教科書を読むこと。

学校の教科書を今一度読み返しましょう。入試直前のこの時期、周りが問題集や過去問をたくさん解いているのを見て焦るかもしれません。しかし、新しい知識や難しい知識を必死に覚えようとすることが効率的でないことは先ほど触れました。それよりも、ずっと使ってきた教科書をもう一度大切に読みましょう。

公立高校の入試は、中学校の教科書の内容を超えては出題されません。裏を返せば、教科書に載っている内容であれば、何でも出題してよいのです。上位の学校でさえ、入試で差を分けるのは誰も解けないような難しい問題ではありません。教科書に載っている基本的な内容なのです。

例えば2025年の秋田県の理科の問題で「視度調節リング」という言葉を答えさせる問題が出されました。これは双眼実体顕微鏡の使い方の手順で出された穴埋め問題です。鏡筒上下式やステージ上下式の顕微鏡の手順であれば、いろんな問題集でも出されますし、北辰や入試の過去問でも見たことがあるかもしれません。しかし、双眼実体顕微鏡の使用手順に関する問題というのはかなり珍しいのではないでしょうか。しかし、学校の教科書には載っているのです。教科書に載っている内容であればどんな内容でも出題の可能性があるということです。写真や資料も含めて、教科書を丁寧に読みこむ時間をぜひ作ってください。

五. 焦っても、不安でも。

入試直前、焦るのが普通です。不安で当たり前です。それでいいのです。それを消すことは出来ません。しかし、それでも淡々と学習を進めましょう。それができてこそ結果を出せる強い受験生になれるのです。そして、ここからは何より健康に気をつけてください。スマホなど眺めて夜更かしをすることのないようにお願いいたします。残り1か月、最後の1分まで大事に過ごしましょう。